

據ト爲ルヘキモノニ非サルヲ以テ上告趣意追申書ノ附論ニ於テ申立又上告人カ召喚ヲ乞ヒタル証人四名ハ私和ニ付テ之カ証明ヲ要シタルモノニ非スシテ特ニ地理ニ精シキ者ナルヲ以テ隨テ境界モ判然スヘキニ付之カ召喚ヲ乞ヒタルニ原裁判所カ治罪法第三百五十七條ニ背キ之ヲ喚問セカルハ不法ナリト申立置タルニ右等ニ對シ本院ニ於テ一誤モ判決ヲ與ヘサルハ治罪法第四百三十六條第二項ニ適當セル哀訴ノ原由アルモノナリト云フニアリ

本院檢事長渡邊曠ハ上告趣意追申書第二條附論ハ單ニ原檢察官ノ答辯ヲ駁撃シタル迄ニ止マレハ固ヨリ判決ヲ與フヘキモノニ非ス又被告カ請求セシ証人ヲ喚問セストノ論點ニ付テハ本院於テ明瞭判決ヲ與ヘタルヲ以テ哀訴ノ原由相立サルモノナリト答辯セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ニ從ヒ代言人今村長善カ陳述ヲ聽ニ哀訴ノ趣意ヲ擴張シ曰事實ノ判定ハ判官ノ特權ニ在リト雖モ全ク不當ノ事實ニ係レモノハ固ヨリ法律ノ許サザル所ノモノナレハ之ニ侵入スルモ敢テ妨ケナカレヘシ抑本訴原裁判ハ判官カ不正ノ証據ヲ採リ事實ヲ誤認シ判決ヲ爲シタルモノナレハ本院ニ於テ治罪法第四百二十八條ニ依リ毀シテ他ノ裁判所ヘ移カルヘキモノト確信スルニ却テ之ヲ棄却セラレタルハ法ニ違フモノ

ナレハ治罪法第四百三十六條一項ニ適當スル哀訴ノ原由アルモノト信セリト立會檢事林三介ハ之ヲ辨駁シ到底哀訴ノ原由アラサルモノナリト開陳セリ仍テ判決スル左ノ如シ

本案哀訴ノ論旨タルヤ二項ノ原由ヲ提出シ更改センコトヲ請フト雖モ其上告趣意追申書第

二條附論ノ如キハ單ニ原檢察官ノ答辯ヲ駁シタル迄ニ止マレハ固ヨリ判決ヲ與フヘキモノ

ニ非ス又請求セシ証人ヲ喚問セストノ論點ニ付テハ本院宣告書ニ「又請求セシ証人ヲ喚問

セラレカリシト云フト雖モ治罪法第三百五十七條ニ裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリ

トスル時ハ云々トアリテ果シテ事實判官カ新タル証人ヲ必要ナリトセサル時ハ之ヲ喚問

セサル敢テ違法ト云フヲ得ス」トアリテ明瞭判決ヲ與ヘアレハ治罪法第四百三十六條二項

ニ適當スル哀訴ノ原由アルモノト云フヲ得ス其他又公廷ニ於テ本訴原裁判ハ不當ノ判決ニ

係ルモノナレハ治罪法第四百二十八條ニ依リ破毀シ他ヘ移カルヘキモノナルニ之ヲ棄却セ

ラレタルハ違法ナルニヨリ治罪法第四百三十六條一項ニ適當セルモノナリト陳述スト雖モ

原上告ヲ以テ棄却ニ付シタル所以ハ其上告ノ旨趣タル總テ破毀ノ原由ナキニ因ルモノニ

シテ其理由ハ業已ニ本院原宣告中ニ於テ辨明セシ如クニ固ヨリ當然ノ處分ナレハ之ヲ指

上告

テ治罪法第四百二十八條ニ違フモノトナスヲ得ス隨テ同第四百三十六條二項ニ適當スヘキ
理ナキヲ以テ本訴ノ旨趣ハ總テ相立タルモノトス
右ノ理由ナルヲ以テ本案既訴ハ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年八月二十九日

裁判長判事 島居 斷三 專任判事 薄井 龍之

判事 中島 盛有 同伴 正 臣

同 小村 壽太郎 書記 澤野 澄藏

柏 ツ 子

右ツチカ被告謀殺事件ノ上告ニ對シ明治十六年六月二十九日本院ニ於テ被告ハ水戸警察分
署及ヒ豫審判事ノ調書等ニ依レハ夫金作カ平素酒色等ニ金錢ヲ冗費シ家産ヲ傾クノヲ憂
慮シ明治十五年十二月中旬頃ヨリ寧口之ヲ殺害スルキト思考シ同月三十一日夜金作カ竈ノ
痰火ニ燬ヲ取り居眠ル隙ヲ窺ヒ先キニ隠シ置キタル鉞ヲ取出シ金作ノ背後ヨリ頸部六ヶ所

ヘ切付ケ仰向ケニ倒シタルヲ尙ホ思ヘ切付ケ而テ鉞ノ背ヲ以テ數回胸部ヲ毆打シ其死シタ
ルヲ認シ得(タヨ)ト共ニ死屍ヲ庭ノ前ニ持出シ又更ニ弟壯之助ト共ニ該死屍ヲ路上ヘ移シ
他人ニ殺害セラレタル体ニ仕做シタルハ被告ニ於テ自白スル所ニシテ其摸樣及ヒ參者人等
ノ陳述等ニ依ルモ被告カ所犯ノ當時精神喪失シタルノ情況アルコトナキノミナラス原裁判官
ニ於テ被告カ犯罪ノ事實ハ豫メ謀テ夫金作ヲ殺害セシモノト判定シタルハ法律ニ抵觸セシ
廉ナシ果シテ然レハ之ヲ刑法第二百九十二條ニ照依セシハ適當ナルヲ以テ上告ノ旨趣ハ總
テ相立タルモノトスト言渡シタル判決ニ對シ右(ツチ)カ上告代言人岡島宗三郎ヲ以テ哀
訴ヲ爲スノ要旨ハ昨キニ本案ノ上告ニ際シ上告人ニ於テハ其犯罪ノ用ニ供シタル鉞ハ夫金
作カ採テ以テ被告ヲ打撃セントスルヲ奪取シ之ヲ俵ノ下ニ隠シ置キタルトノコトヲ陳辨シ
タルモノニシテ決シテ毫モ犯罪ノ用ニ供セン爲メ之ヲ隠シ置キタルトノ無根ノ事實ヲ陳供
セカリシ然ルヲ大審院ニ於テハ被告カ所爲ハ謀殺ニ非カラスノ陳供中最大要件タル該鉞ノ
點ヲ輕看セラレ終ニ該陳供ニ對シテハ之カ判決ヲ與ヘラレス反テ被告ニ於テ謀殺豫備ノ爲
メ之ヲ隠シ置キタルカ加ク原裁判ト同一ノ旨趣ニ判定セラレタルハ即チ治罪法第四百三十

上告

六條第二項ニ適當スルモノ也ト云フニアリ依テ本院檢事林三介ノ陳述ヲ聽キ判決スル左ノ如シ

抑被告カ其先キニ隠シ置キタル所ノ銀ヲ以テ夫金作ヲ打テ殺シタルトノハ原裁判所カ判定スル所ノ事實ニシテ本院ニ於テモ亦先キニ該判定ヲ監査シテ其事實ヲ陳叙シ其揆不適當ノ點ヲシテ判明シタルモノナレハ其訴入カ訴旨ノ如ク治罪法第四百三十六條第三項ノ場合ニ相當スルモノニ非ストス何トナレハ被告カ犯罪ノ用ニ供シタル所ノ銀ハ前述ノ如ク原裁判所ニ於テ既ニ判決ヲ與ヘタル所ノモノナレハ之ヲ要スルニ其訴ノ論旨ハ總テ承審官ノ判定シタル事實ニ侵入シ之カ當否ヲ論難スルニ過キスシテ其訴ヲ爲スヲ得ルノ原由之ナキニ付キ治罪法第四百二十七條ノ規則ニ照シ之ヲ棄却スル者也

於大審院檢事林三介立會宣告ス

明治十六年九月一日

裁判長判事 鳥居 斷三

專任判事 兵頭 正 認

判事 伴 正 臣

同 溝 井 龍 之

同 國 田 弘

書記 岩 田 鍊

○再審ノ訴

安 部 龍 寶

右安部龍寶カ明治十四年十一月中人ノ衣類ヲ竊取シタル事件ニ付明治十五年二月十五日京都輕罪裁判所ニ於テ重禁錮六年三月ニ處シ監視二年ヲ附シタル裁判言渡ニ對シ安部龍寶ニ於テ明治十五年十一月四日付ヲ以テ再審ノ訴ヲ爲セリ其要旨ハ安部龍寶カ事犯ハ新法實施以前ニ係リシモノナレハ附加刑監視ハ適用スヘキモノニアラス然ルチ原裁判所カ之ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ニアラサレハ被告サシテ徒ニ陷害セシメタルモノナリト云フニ在リ大審院檢事長渡邊驥ハ本訴ハ治罪法第四百三十九條ニ定メタル再審ノ原由ト爲ス可キモノニアラスト思料スルトノ意見ヲ附セリ茲ニ判決スル左ノ如シ

安部龍寶カ訴フル所ハ止マ擬律錯誤ニアラサレハ被告サシテ陷害セシメタルモノナリト云フニ過キスシテ治罪法第四百三十九條ニ定メタル再審ノ訴ヲ爲スヲ得ル場合ニ適當セカ
ルモノトス因テ再審ノ訴成立サル者トシ直ニ之ヲ棄却スル者也

再審ノ訴

明治十五年十二月二十一日

裁判長判事	岡内 重俊	專任判事	大塚 正男
判事	中島 錫胤	全	關 義臣
全	鳥居 斷三	全	兵頭 正盛
全	山根 秀介	全	土師 經典
全	昌谷 千里	全	小村 壽太郎
全	木付 義路	書記	岩 田 鍊

○裁判管轄ヲ定ムルノ訴

山 本 文 藏

明治十六年五月二十五日兵庫重罪裁判所ニ於テ右山本文藏カ被告事件ニ付被告ハ明治十五年三月中大津營所復習招募ノ際旅費金ヲ受取ナカラ逃走セシ所爲アルヲ以テ別ニ毆殺ノ罪アルモ此裁判管轄ハ陸軍裁判所ニ屬スルモノニシテ當兵庫重罪裁判所ノ管轄ニ非ストシ治罪法第二百七十七條ニ照シ管轄違ノ言渡ヲ爲シヨリ

右裁判確定シタルニ因リ同裁判所檢察官ヨリ大阪鎮臺ヘ之ヲ送付シタルニ同臺ニ於テハ本案ハ軍事常事ノ兩犯并發ニ係リ舊例ニ依リ其重キ罪ヲ處斷スル法術ノ處分ニ屬スヘキ者ニシテ其招集ニ應セサル軍事犯ノ件ハ毆斃人ヲ死ニ致ス常事犯ヨリ輕キヲ以テ當法術ニ於テ審判スヘキモノニアラストシテ返戻セリ因テ原裁判所檢察官福鎌芳隆代理檢察補井水幸三郎ハ以上ノ事由ヲ具陳シ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲シ之ヲ管理スヘキ裁判所ノ定示ヲ請求セリ

茲ニ治罪法第四百五十條ノ規則ニ從ヒ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長渡邊驥ノ意見書ニ依リ判決スル左ノ如シ

訴訟書類ヲ査閱スルニ本案被告事件ハ被告人山本文藏ニ於テ豫備軍在籍中明治十五年三月大阪鎮臺大津營所ヘ復習ノ爲メ招集ノ際旅費受取タル未逃走シテ竟ニ招集ニ應セス其後同年十二月三十一日兵庫縣攝津國川邊郡新田中ノ村ニ於テ毆斃ニ因テ人ヲ死ニ致シタル所爲是ナリ陸軍刑法ヲ見ルニ其第十一條ニ曰豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ招集中ノ外此刑法ニ依テ處斷スルヲ得ス但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス其第七條第二項ニ曰歸休兵及

裁判管轄ヲ定ムルノ訴

豫備後備ノ軍籍ニ在ル者故ナク召集ノ期ニ後レ十日ヲ過ル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ云々トアルニ依リ乃チ本案事件ハ右第二項ノ支配スヘキ者ト他ノ事犯ト俱發シタル者トス面ノ今ヤ己ニ陸軍治罪法ヲ施行セラレタルヲ以テ之ヲ全法ニ照スニ其第二十一條ニ陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス余罪俱ニ發シタル者モ亦全シトアルニ依リ數罪俱發ノ場合ニ於テ一ノ陸軍刑法ヲ犯ス者アレハ其他輕重ニ拘ハラス併セテ之ヲ陸軍法衙ノ審判ニ付スヘキハ判然ヨリ

右ノ理由ナルヲ以テ本案被告事件ハ普通裁判所ノ管轄ニ非ス大阪鎮臺軍法會議ニ於テ之ヲ管理スヘキ者也

大審院會議局ニ於テ

明治十六年八月二十七日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 高 木 勲
 判事 大塚 正男 同 鳥居 斷三
 同 山根 秀介 書記 石田 徹郎

雜之部

柳 嶋 新 二

明治十五年七月六日長岡輕罪裁判所ニ於テ柳島新一カ証券印稅犯則事件ニ付呼出ヲ受ケ無届不參スル所爲ヲ審判シ明治十年第五號布告ニ照シ科料金一圓五十錢ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ同裁判所檢事福中原止夫ハ上告ヲ爲シヨリ其旨趣ハ治罪法ニ於テ呼出ニ應セサルノ罰ハ証人鑑定人等コ科スヘキモノニシテ刑事被告人ニ對シ呼出ニ應セサルノ罰アルナシ本案被告人カ犯則事件ハ明治十四年中ニアルモ其不參シタルハ十五年後ニ係リ即チ新法施行後ノ犯罪ナレハ從前ノ手續ニ依リ處分スヘキ理由ナキモノナルニ原裁判所カ十四年前ノ手續ニ從ヒ科料ヲ言渡シタルハ不法ナリト云フニ在リ大審院ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ之レヲ判決スルヲ左ノ如シ

被告事件ニ關シ裁判所ノ呼出ヲ受ケ之レニ應セサルモノニ對シ罰金科料ヲ言渡スハ治罪法中其正條アルニ依リ明治十年第五號布告ハ新法實施後ニ在テハ單ニ民事上ニ付呼出ヲ受ケ遲參不參スルモノヲ罰スルノ法律ニシテ之レヲ刑事ニ適用スルヲ得サルモノトス面シテ

雜之部

四百三

治罪法ニ於テ呼出ニ應セザルノ所爲ヲ罰スルハ証人鑑定人ニ限ルモノニシテ被告人召喚ノ日時ニ出廷セザルハ直チニ拘引狀ヲ發スルノ方法アルヲ以テ別ニ罰金科料ヲ言渡スノ正條アルコト無シ又明治十四年第八十二號布告ニ治罪法ニ拘ハラス従前ノ規則ニ從ヒ處分スヘシキアラハ治罪手續上ノ規則ヲ指スモノニシテ罰金科料處分ノ如キ法律適用上ニ關スヘキモノニアラス然ルニ原裁判所ニ於テ被告人カ法律ニ正條ナキ無届不參ノ所爲ニ對シ科料ヲ刑ヲ言渡シタルハ明治十年第五號及ヒ同十四年第八十二號布告ヲ誤用セシモノニシテ即チ擬律ノ錯誤ニ係ル不法ノ裁判ナリト確認ス

右ノ理由ナレヲ以テ治罪法第四百二十八條第四百二十九條ノ成規ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ撤毀シ之ヲ取消スモノナリ

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月十七日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 昌谷 千里
判事 中島 盛有 同 山根 秀介

全 高 木 勤

書記 山 藤 武男
佐 藤 小 六

右小六ニ對シ明治十六年三月十五日芝區治安裁判ハ呼出當日病氣ト詐稱セシノ故ヲ以テ罰金五圓ト言渡タル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ明治十六年三月十四日呼出ニ對シ出頭セサルモノハ他ニアラス疾病ノ故ナルコトハ届書ニ因レハ了然タリ其病質ハ莫麻質斯也然レモ輕症ナレハ其日午後ニ至テ痛ミ少ク減セリ故ニ親友廣田敬寛ニ協議ノ要件アリテ病ヲ勉テ赴キタリ然ルチ原裁判ハ病氣ト詐稱シ召喚ヲ規避シタルモノトセラレタルハ何ノ證據アリテ詐リタリトセラレタルヤ其事實ヲ審究セス輒ノ罰金ノ處分ニ及ヒタルハ不當ノ裁判ナリト云フコトアリ

對手人檢事河津祐雄ハ上告趣旨ノ不當ナルチ辨駁シ原裁判允當ナリト營辨セリ
大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審察スルニ原裁判言渡ニ本衙ヘ出頭當日病氣ト詐稱シ其身ハ南豐島郡代々木村廣田敬寛方ヘ行キ故ヲニ召喚ヲ規避シ不參スルチ以テ罰金五圓申付ルトノミアリテ何等ノ證據ニ依リ詐稱セシモノト認ムタルヤ

雜之部

其證憑ノ何ヲ示サス或ハ云ハシ本案ノ如キ無届遅不參等ハ特別ノ者ニテ民事廷ニ於テ
直ニ其科罰ヲ言渡スルキモノナレハ治罪法ノ定規ヲ履ムニ及ハスト然レモ證憑ヲ明示ス
ルキハ其裁判ノ信憑ヲ鞏固ナラシムル爲メナレハ綜合治罪法ノ定規ヲ履行スルニ及ハサル
モノトスルモ當然裁判官ノ職務上ノ責任タル論ヲ俟サレナリ加フルニ其罰金ヲ言渡サルハ
何等ノ法律ニ依ルモノナルヤ是亦其法律ヲ明示セス共ニ越權ノ處分ニ出テタル上告ノ理由
アル裁判ナリト判定ス

右ノ理由ニ基キ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ適法ノ裁判ヲ受クシタル爲メ
浦和輕罪裁判所ニ移ス者也

大審院ニ於テ檢事武内維積立會宣告ス

明治十七年二月十四日

裁判長判事 岡内重俊

專任判事 鳥居斷三

判事 關義臣

同伴 正臣

同 昌谷千里

書記 香田能典

明治十七年十一月二十四日
同 十八年三月 日

出版御届

刻成

編輯兼
出版人

愛媛縣士族

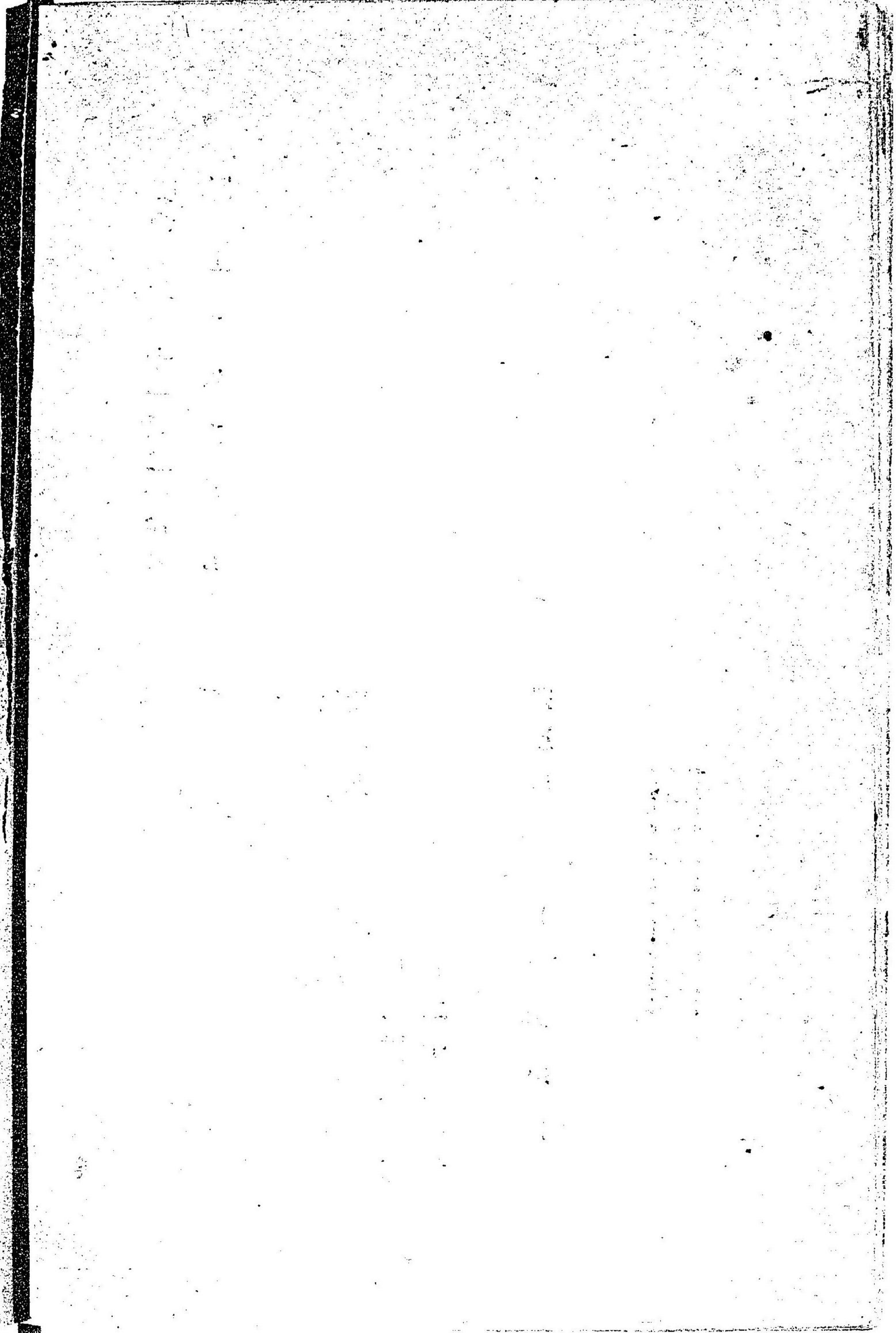
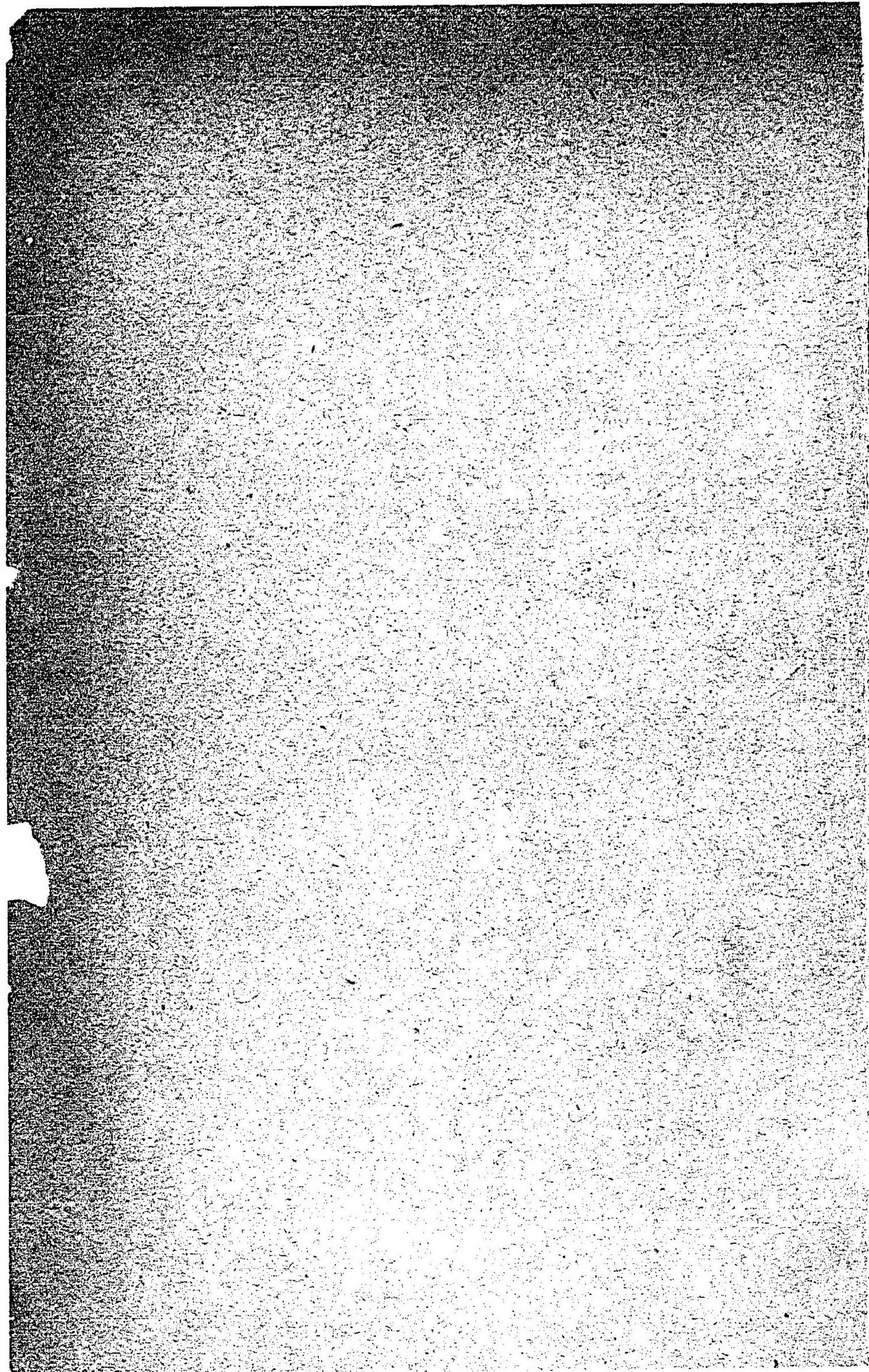
福富 恭禮

伊豫國温泉郡西
町二十六番地

印刷所

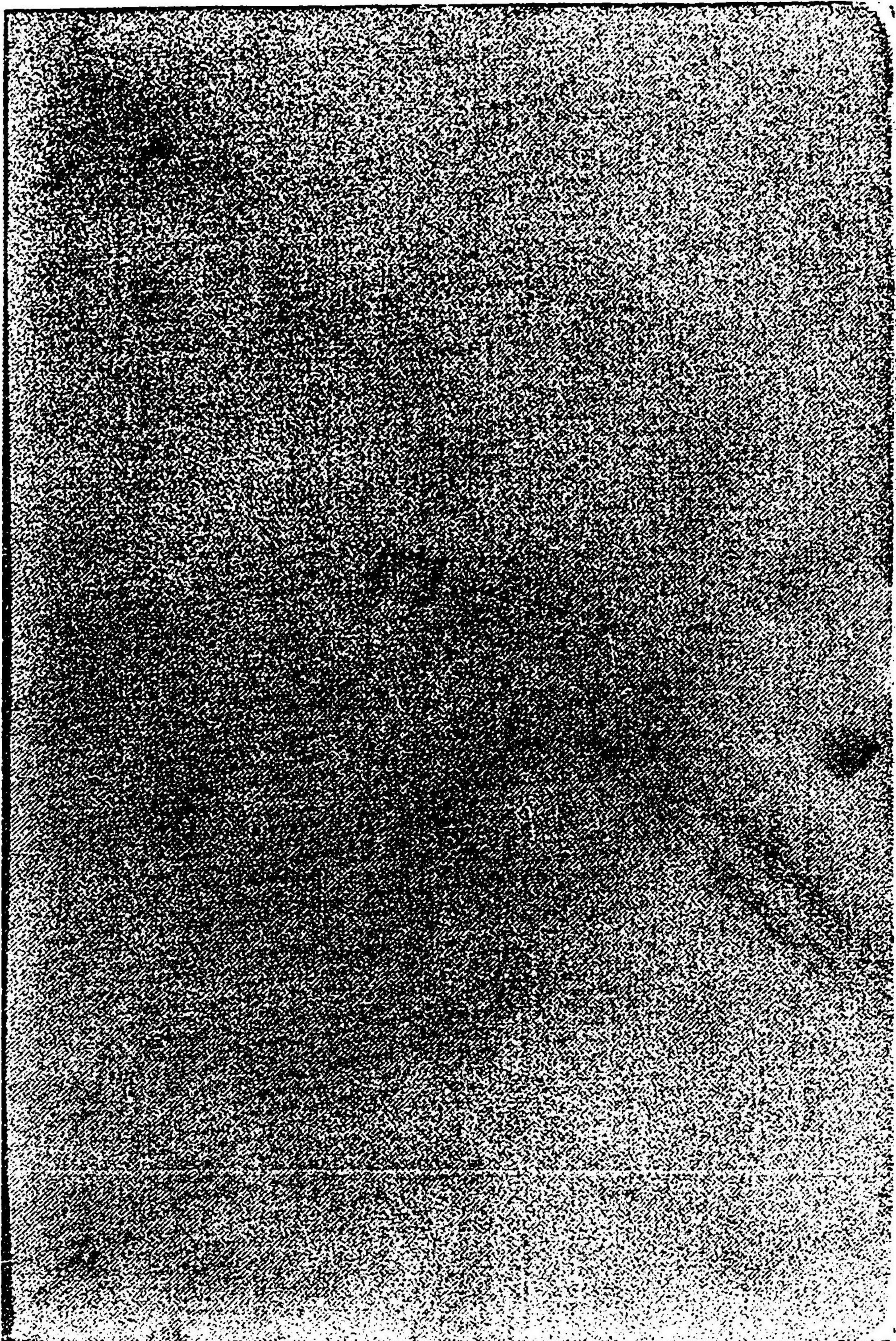
松山廣道館

定價金七十五錢



33

26



禁電子式複写

036553-000-5

CZ-2711-02

大審院高等法院刑事判決大全

福富 恭礼 / 編

M18

BBR-0447



